

フライデーの無人島からの出奔は何を意味するのか

『フライデーあるいは太平洋の冥界』における
ロビンソンの記号学へのアイロニーを中心に

中江 太一

ミシェル・トゥルニエのデビュー作である『フライデーあるいは太平洋の冥界』（以下、『フライデー¹』）の読者は、フライデーがロビンソンを残して無人島を去ってしまう、小説最後のどんでん返しに恐らく意表を突かれるだろう。ロビンソンとの幸福な生活をようやく手にしたばかりのフライデーは、なぜロビンソンを見捨て、イギリス人たちと旅立ってしまうのだろうか。この出来事が起こる 11 章の直前の 10 章では、ロビンソンの日記「航海日誌」の中でフライデー讃歌が全面的に展開され、両者の双子化の夢までもが語られているだけに一層のこと、フライデーの裏切りは予想外のものに映る。当然、この箇所はトゥルニエ研究者の頭を悩ませており、数多くの注釈が試みられてきた。近年の論文でキアラ・メンゴッツは、これまでの解釈をまとめているが、そこで挙げられているのは、次の 3 点である。①フライデーが近代の文明の利器に魅了されたため、②フライデー不在という苦難を乗り越えロビンソンが次なる変身を遂げるため、③ロビンソンがさらなる冒険を続けるためないし、トゥルニエが物語をさらに書き換えていくため²。その一方で、当のメンゴッツは、「我々が遊びの中に入り、外に出ていくのを可能にしてくれるのと同じ自由さで、フライデーはトゥルニエによって作られたフィクションの中に入り、外に出ていくのである³」と自身の見解を述べている。これまでの解釈の特徴は、この場面について、自由奔放なフライデーのキャラクターを物語るエピソードとして見るか、通過儀礼小説とも言われる『フライデー』の根幹をなすロビンソンの変身 *métamorphose* のテーマとの連関において捉えていることにある。なぜフライデーは島を去ったのか。このように

¹ 以後、『フライデー』からの引用は全てプレイヤード版 (Michel Tournier, *Vendredi ou les limbes du Pacifique*, dans *Romans suivi de Le Vent Paraclet*, Paris, Gallimard, coll. « Bibliothèque de la Pléiade », 2017) から行う。文中で引用する際は、引用文の後の括弧の中で VLP の省略記号を用い、右隣に引用頁を付す。

² Chiara Mengozzi, « Les marges de l'homme en jeu aux limbes du Pacifique », *Revue Romane*, n° 52 (2), 2017, p. 278-279.

³ *Ibid.*, p. 279.

問うことは、小説を完結させるために必要であったフィクションの綾とも作家の遊び心とも見なしうるかもしれず、その理由を分析することにはそれほど意味がないように思われるかもしれない。しかし、これまでの解釈に問題点があるとすれば、当初の主人と奴隷から対等な立場へという2人の登場人物の関係の変化、そしてロビンソンの変身という主題に目を囚われるあまり、このエピソードに込められた意味を十全に理解できていないことである。この小説は、そのタイトルとは裏腹にロビンソン中心の視点で書かれており、フライデーは、ロビンソンの目に映ったフライデーであることに注意する必要がある。フライデー自身の言葉と考えが直接書かれていない以上、なぜという問いは推測の域を出ず、宙をさまようだけであろう。それゆえ本稿では、論点をフライデー出奔は何を意味するのか、またそれによってどのような読みの可能性が生まれるのかに求めてみたい。ここでは問いがフライデーの裏切りにまつわるものであるから、ロビンソンとフライデーの関係を改めて整理することから始めることにする。すでに述べたように、『フライデー』において語りの視点人物はロビンソンに集約されており、2人の登場人物は明らかに同じ比重で書かれていない。よってロビンソンがフライデーをどのように捉え、関係を築いているのかという観点から分析する必要があるだろう。その際に重要になるのがロビンソンによる模倣としるしの解釈である。ロビンソンは、島の自然と調和し、狩りや遊びの才に長けたフライデーを模倣し、遂には双子化のヴィジョンを語るまでに同化していくことになる。その一方で、「フライデーが中心となっていて、私が解こうとしている意味の枷（もつれ）*écheveau*」（VLP, 161）という言葉に象徴されるように、ロビンソンは、フライデーに関連した言葉や外界の現象の中に自らの変身の可能性を示し、また自分自身を理解するためのしるし *signe* を見出していく。しかし、このようなロビンソンの振る舞いは、フライデーとの相互的な理解が得られないままひとり歩きしているように思われる。フライデーの出奔という出来事を媒介に、肯定的な面ばかりが強調されることの多い、フライデーを模範にしたロビンソンの変身に孕まれた両義性を見ていく。そして、その先に見えてくるトゥルニエの第2作目の小説である『魔王』とのつながりについても触れることにしたい。

視点人物はだれか —— 他者としてのフライデー

島を無言で立ち去ってしまう当事者のフライデーが、どのような人物として描かれているのかを最初に簡単に振り返っておこう。この人物は、書き換えの元になったデフォアの『ロビンソン・クルーソー』にすでに登場している。この小説において、人肉食の習慣を捨てきれない野蛮な黒人であったフライデーは、キリスト教を中心にした道徳的な教えを受けることで、文明化され、主人のロビンソンに仕える従順な召使いとなる。それに対して、トゥルニエはこの教育者－被教育者の関係を逆転させている。すなわち、黒人の血を引くフライデーが、白人かつ文明社会の人間であるロビンソンを教え導くことになるのである。300年にわたるロビンソン物語 *robinsonnade* の歴史においても、野蛮－文明という2項のこの転倒こそが、『フライデー』の革新性が評価される由縁のひとつである⁴。それでは、ロビンソンはフライデーから何を学ぶことになるのだろうか。もう少し具体的にフライデー像を見ていくことにしよう。

小説も半ばを過ぎた7章で、フライデーは無人島スペランザにやってくる。その頃すでにロビンソンは、水時計によって時間を管理し、島を測量することで自然を支配し、法律の制定など文明社会を再生産する試みに限界を感じている。救世主フライデーは、ロビンソンにとって身体的・精神的な変身を促す触媒となるが、その関係は一朝一夕に生まれるのではない。当初、トゥルニエのフライデーは、デフォアのフライデー以上に劣った「奴隷 *mon esclave*」(VLP, 103)として扱われ、徹底的に文明化されることになる。しかし、このようなロビンソンの「啓蒙」にもかかわらず、フライデーは、この主人の意のままにはならず、ロビンソンが苦勞して作り上げた疑似文明社会を次々と壊していくことになる。フライデーには独自の秩序だった世界があると感じつつも、それを見抜くことができなかつたロビンソンであるが、孤独な生活を象徴する洞窟の爆発の一件を経て、フライデーを師として

⁴ 例えば、ロビンソン物語についての研究書を編集したリーズ・アンドリーズの以下の言を参照のこと。「ミシェル・トゥルニエが彼の小説の中でどれほど素晴らしい役割をフライデーという人物に与えたかはよく知られていることである。というのも、初めて主人と奴隷の関係が逆転し、ヨーロッパ人たるロビンソンがアラウカニア族のフライデーの弟子になるからである。」(Lise Andries, « Les accessoires de la solitude », in Lise Andries (dir.), *Robinson*, Paris, Autrement, coll. « Figures mythiques », 1996, p. 23.)

仰ぐことになる。非常に図式的にまとめるならば、フライデーの魅力は、まずロビンソンという「文学的神話 *mythe littéraire*⁵」の偶像を壊してしまう点に求められるだろう。プロテスタント的な労働と蓄財に基づく資本主義の精神とは、真っ向から対立する人物だからである。ロビンソンは、ひたすらに働き、生産した食糧を貯蓄することで現在の時間を未来へと先送りし、また過去の世界をノスタルジックに回想する。それとは対照的に、フライデーは労働を毛嫌いし、サボテンに服を着せて一種の仮装行列をして遊んだり、煙草を吸ったりして怠けてばかりで、その行動の原則は常に「いま、ここ」を享楽することである。また、文明人以外の存在を下等に見るロビンソンとは異なり、フライデーは、ハゲワシの雛を保護したり、アンドアールと名付けられた雄ヤギに対して一騎打ちの闘いを挑んだりするなど、とも対等に接している。アニミズム的な振る舞いさえ見せるこの人物は、自然との調和的な関係を容易に築いてしまうのである。加えて、この人物は遊びや狩りなどにも才能を発揮し、フライデーとロビンソンが和解する9章では、フライデーの凧作りや「風が唯一の演奏者となる」(VLP, 147) アイオロス琴作りの描写がことのほか印象的である。ありあわせの素材から即興で次々と遊び道具や楽器を作り出していくことからわかるように、美的感覚にも長けたブリコラージュの天才ともいえよう。そして、凧やアイオロス琴といったフライデーが作るものは、全て風あるいは大気の元素へと結びついていることも忘れてはならない。その一方で洞窟に暮らし、スペランザと性愛関係を結ぶロビンソンは、大地の元素に結びついている。「いま、ここ」に応じて即興的な行動を取り、大気のように軽やかなフライデーは自らが変身すべき理想像となるのである。

以上簡潔に整理したことからもわかるように、この小説の独創性はタイトルにもなっているフライデーに存していると見て間違いないだろう。しかし、語りの方からこの小説を眺めてみれば、フライデーは決してその中心に位置していないことに注意すべきである。『フライデー』という小説は、基本的に俯瞰的な視点、あるいは自由間接文体的なロビンソンの内的独白を含めたロビンソン視点の三人称で書かれている。その一方で、語りがフライデーに寄り添うのは、唯一ロビンソンが1人で外出した場面が描かれる8章の中の

⁵ Jean-Paul Engélibert, *La Postérité de Robinson Crusoe : un mythe littéraire de la modernité, 1954-1986*, Genève, Droz, 1997 を参照。

2度限りである⁶。「航海日誌」によってロビンソン自身の言葉がそのまま記されていることも踏まえるならば、語りの重心は明らかにロビンソン側に傾いており、この小説のタイトルが『フライデーあるいは太平洋の冥界』であるのはミスリーディングとさえいえるかもしれない。「洞窟が爆発した後のフライデーの役割は人の目をまやかすべきではない。創造者、登場人物はロビンソンである。ある意味でフライデーというタイトルは見せかけなのだ。トゥルニエの書物は、やはり1つのロビンソン物語である⁷」とジャン＝ベルナル・ヴレイが的確に指摘している通りである。主人公はやはりロビンソンであって、終始ロビンソンの視点で書かれたこの小説の語りの構造を見過ごすことはできない。全12章のうち、和解した後の2人の関係が三人称で語られるのは、9章だけである。10章は完全にロビンソンのモノローグであり、11章ではイギリスから船がやってきて、フライデーが立ち去ってしまうからである。このように見たとき、語りの面から言ってもフライデーは、ロビンソン自身の言葉通り、「唯一の「他者」」(VLP, 159)であり、描かれているのは、ロビンソンにとってのフライデーであることに注意しなければならない。両者の良好な関係が唯一、三人称視点で書かれた9章においても、その大半を占める、フライデーの雄ヤギとの闘い、この動物の死骸から凧とアイオロス琴を作る過程は、終始一貫してロビンソン目線で語られている。例えば次のような表現からもそれがわかるだろう。「ロビンソンは、フライデーを相変わらず理解することなく観察していたが、まるで、人間の頭脳には複雑で理解不可能な習性をもった昆虫の行動を観察しているかのようなであった」(VLP, 147)。結局、この小説では、ロビンソンの変身ぶりと内面は事細かく描かれるのに、フライデーの内的焦点化といえるような箇所が見当たらない。それと相関して、ロビンソンの目から見たフライデーの行動は、理解不能なものとして提示され、大きな謎として立ちはだかることにもなる⁸。フライデーについては、「意志の観念」(VLP, 132)が相応しくないとされ、「そこから行動が由来するひとつの自然」(VLP, 132)であり、また「過去

⁶ ジュネットの指摘を参照のこと。Gérard Genette, *Palimpsestes. La littérature au second degré* [1982], Paris, Éditions du Seuil, coll. « Points essai », 2007, p. 517.

⁷ Jean-Bernard Vray, *Michel Tournier et l'écriture seconde*, Lyon, Presses universitaires de Lyon, 1997, p. 319.

⁸ 「獲物も的もない矢を射ることにフライデーは憔悴するほど力を入れているが、その意味は何かとロビンソンは、長い間考えていた」(VLP, 137)や「アンドアールが飛ぶよ、アンドアールが飛ぶよ、と相変わらず自分の意図を隠しながらも非常に興奮してフライデーは繰り返した」(VLP, 142)といった表現にもそれが認められる。

や未来といった観念を知らず、現在という瞬間に閉じ込められて生きている」(VLP, 134)と言われている。フライデーが徹底して外から描写されているのは、このように自然と同化した本能的な人間として造形されていることにもよるのかもしれない。しかし、その結果として、読者もロビンソンの目線に即してフライデーを想像することになる。このことによって、ロビンソン視点から提供される情報しか知らない読者は、ロビンソンと自然に一体化してしまい、11章でのフライデーの出奔に不意を突かれることになる。同時に、このような語りによって、我々はフライデーが何を考え、ロビンソンのことをどのように思っているのかを本当には知ることができない。語りのレベルにおいて、ロビンソンとフライデーの間には著しい非対称性があるのである。

フライデーがどのような点で革新的なイメージを作り出したかについてはすでに言及した。語りの視点に着目した今、改めてロビンソンにとってフライデーがどのように捉えられているのかを見る必要があるだろう。もう一度確認すれば、島を支配する試みが袋小路に陥っていたロビンソンにとって、フライデーは模範となる存在である。その一方で、多くを語らず、容易にはその言動を理解できないフライデーは、謎多き人物でもある。そこから観察に基づく模倣とフライデーを記号として解読するという、ロビンソンの対フライデー関係が現れてくる。「ロビンソンとフライデーの関係が深まり、人間らしいもの」(VLP, 149)になり、ロビンソンがフライデーに同一化していく過程で見逃せないのがこの2つの特徴である。フライデー視点で語られないことと相関して、この人物は、「ロビンソンがその鍵をもっていない隠された宇宙」(VLP, 114)と表現されている。ロビンソンは、言葉少なで内面の見えないフライデーを身体・行動の両面で模倣していくとともに、フライデーの一挙手一投足を自らの変身の潜在性を示す記号として読み解いていく。

フライデーは平然として *imperturbablement* —— そして無意識に *inconsciemment* —— 新たな時代の到来の前奏となる大事故を準備しており、続いてそれを引き起こしたのだ。この新しい時代とは何かを知るとなれば、おそらくフライデーの性質そのものにおいてその予兆を読み取るように努めなければならないだろう。(VLP, 132)

フライデーの煙草の火の不始末から起きた火薬の爆発によって、住居であった洞窟は瓦礫の山と化す。この洞窟は、難破船から持ってきたイギリスの品々で溢れていたことで「人類博物館 *musée de l'humain*」(VLP, 46)と呼ばれ、

また食糧の貯蔵庫としても機能していた。つまり、祖国イギリスへの郷愁とプロテスタント的倫理を象徴する蓄財という、ロビンソンの存在基盤そのものが、この事故によって無に帰すことになる。ここでも忘れてはならないのが、「平然として——そして無意識に」という副詞であって、ロビンソンにとっては自分の変化のために必然的な過程だったとしても、フライデーにとってそれは偶然的な産物にはかならないことを示している。あくまで「新たな時代」は、ロビンソン視点であることが含意されているのである。それまでのロビンソンは、農業に励み、女性として捉えられた無人島スペランザと性愛関係を結ぶことで「大地の王国 *ce règne tellurique*」(VLP, 135)に暮らしていた。「新たな時代」とは、それに代わる大気(風)に象徴されるフライデー中心の世界のことを意味している。こうしてロビンソンにとって、フライデーは自らの命運を読み取るための鏡となり、模倣の対象となるのである。

ロビンソンはフライデーを観察していた。この人物の行動、そしてそれが自分の内部で起こす反響の両方を、情熱的な注意深さで観察していたのだ。その反響は、自分の内部で秩序を転覆するような変身と呼び起こすのである。(VLP, 134)

学ぶべき模範となったフライデーを、ロビンソンは熱心にそして細部に至るまで観察する。しかし、それは単なる観察に留まらず、フライデーの模倣によって自らの変化を経験することでもある。

こうしてロビンソンはひと世代分若返った。そして鏡をぱっと見やると——十分説明のつく類似現象によって——ロビンソンとフライデーの顔には、はっきりとした類似がそれ以来存在しているということさえ明らかになったのだ。(VLP, 135)

「尊大で家父長的な容貌」(VLP, 135)の象徴であった髭を剃るようになると、ロビンソンの顔は実際にフライデーと似てくるのである。外見の類似は、フライデーの無意識的な模倣の1つの証であるが、ロビンソンの模倣は無意識の次元に留まらない。ロビンソンの変身は、フライデーの意識的な模倣によってさらに推し進められていく。「フライデーに勇気づけられると、それ以来太陽に裸をさらすようになっていた」(VLP, 135)とあるように、肌を焼くことで、褐色のフライデーの身体へとさらに近づこうとする。「かつてなら自分の威厳にそぐわないと判断したであろう、遊びや運動をフライデー

と分かち合う」(VLP, 135) ロビンソンは、逆立ちの練習に励むことで、超人的な身のこなしを誇るフライデーから身体の使い方を習得しようと努める。また、大地から大気へと向かう儀式のひとつとして行われる崖登りの試練においてもフライデーが手本であり、「なんどもフライデーがやっているのを見たように」(VLP, 140) 岩場を飛んでいく。このようなロビンソンによるフライデーの模倣は、最終的に「フライデーに似せてくれ」(VLP, 154) と太陽に呼びかけるロビンソンの姿へと結実するだろう。「大地の王国」に続く、風の王国とでも名付けられそうな「新たな時代」において師となるのはフライデーであり、ロビンソンはフライデーにできるだけ近づく必要があるのだ。しかし、両者の間の距離が保たれていた模倣を超え、このようなロビンソンの振る舞いは、フライデーとのほとんど同一化の願望へと近づいていくように思われる。ここからは、この模倣がほとんど同一化へと至る過程で重要な意味をもつ、ロビンソンによる「しるし」解釈が見出せる 10 章を詳細に分析することにしよう。

しるしとしてのフライデー —— ロビンソンの記号学

全般に渡りロビンソンによる「航海日誌」で書かれた 10 章は、リン・サールキン・スピロリによれば「象徴的な言語の頂点⁹」であり、それを受けてアルレット・ブルミエは、「語り手—作家と登場人物がただ 1 つの声の凱歌の中で結び直される」と述べている。それ以前の三人称による語りと「航海日誌」が統一された『フライデー』の中で完成された語りであり、現在形で綴られていることによってロビンソンが「永遠を勝ち取った¹⁰」ことが示されているというのである。確かに、この章では、それまでの無人島生活が回想されるだけでなく、太陽への帰依、そしてニーチェ的な永遠回帰のヴィジョンが綴られており、ロビンソンの変身を物語る小説のエピローグとも言うべき箇所である。そのような小説を総括する思想とともに 10 章では、フライデー讃歌とも言うべき様々なイメージが展開されている。続く 11 章では、イギリスからやってきた船乗りたちの描写が続き、両者の関係が多くは語られないことを考えれば、ロビンソンの言葉に基づくフライデー像を詳細に分析する必要があるだろう。この章でとりわけ目を引くのが、自らの命運を示す「し

⁹ Lynn Salkin Sbiroli, *Michel Tournier. La séduction du jeu*, Genève, Slatkine, 1987, p. 152.

¹⁰ Arlette Bouloumié, *Arlette Bouloumié commente Vendredi ou les limbes du Pacifique de Michel Tournier*, Paris, Gallimard, coll. « Foliothèque », 1991, p. 44.

るし」としてフライデーを読み解こうとするロビンソンの姿である。しかし、この直後にフライデーがロビンソンを裏切ることを勘案すれば、ロビンソンの言葉を注意深く見ていかなければならない。

ロビンソンのフライデーをめぐる想像はまず身体のレベルで起きている。海からあがってきたフライデーの姿を見たロビンソンは、イメージを膨らませていく。まず超人的な水泳能力をもつフライデーの手は、「茶けたトリトンのような体と調和した、水かきのついた長く繊細な鰭」（VLP, 153）と形容され、ギリシア神話に登場する半人半魚の海神と重ねられている。そして、人間の枠を超えてイメージされるフライデーの「優美さ *grâce*」の秘訣を探る段になって、フライデーはいよいよ聖人の域にまで高められることになる。踊り子のように軽やかな身のこなしと、「宗教画に描かれた天使たちのような」（VLP, 157）仕種によって、「*grâce* という語の 2 つの意味 —— 踊り子に当てはまる意味と聖人に関する意味」（VLP, 154）が見出されるのである。こうして身体をめぐるイメージから始まったロビンソンのフライデー解釈は、さらに 3 つのレベルで展開される。①*grâce* から続く語からの連想②タロットカード③月の動きの中に見る双子化と永遠化の夢である。順に整理していこう。

①フライデーの優美さは、水から出てくるフライデー *Vendredi* にヴェニウス *Vénus* の姿が結び合わされることで、*grâce* の類義語である *vénueté* という語を喚起する。この美の女神になぞらえられて、天使に例えられていたフライデーは、さらに神格化されているのである。ここには、英語の『ロビンソン・クルーソー』から、トゥルニエの小説がフランス語に移し替えられたことを利用した遊び心も感じられるだろう。英語の金曜日 *Friday* の語源¹¹においては、ヴェニウスとの関連が直接見えないからである。しかし、ロビンソンの夢想はここで終わらない。「これはフライデーが中心となっていて、私が解こうとしている意味の枷（もつれ）*écheveau* の糸の 1 本にすぎない」（VLP, 161）と言われるように、ロビンソンの記号解釈はいよいよ本格化していく。ヴェニウスとのアナロジーは、次には「フライデーの語源的な意味」（VLP, 161）との関連で解釈されている。金曜日 *Vendredi* は、ヴェニウスの日であると同時に、キリストが十字架にかけられた日でもあり、それゆえフ

¹¹ 英語の *Friday* の語源は、「the day of Friya or Frigga（フリヤあるいはフリグガの日）。フリヤは北欧の愛の女神であり、フリグガはウォーデンの妻である」（ジョーゼフ T. シップリー『シップリー英語語源事典』梅田修、眞方忠道、穴吹章訳、大修館書店、2009 年）。

ライダーは、「ヴェネユスの誕生、キリストの死」(VLP, 161)を象徴的に意味していると言われることになる。言語の中に現実の反映を見てとるミモロジックな想像によって、プロテスタント(キリスト教徒)としてのロビンソンの死が、フライデーというヴェネユスの誕生=スペランザへの到来と解釈されるのである。

②次に来るのはタロットカードである。『フライデー』の序章では、難破船ヴァージニア号の船長であったファン・デイセルが、謎めいたタロットカードを次々とロビンソンに読み上げる。タロットカードの小説における意味についてはすでに多くの研究があるが¹²、ここでは、船長の引いた12枚のカードが12に分かれたこの小説の各章と対応関係になっており、小説の入れ子構造をなしていることを抑えておけば十分である。ロビンソンが10章で直接意味を読み取っているカードだけを参照しよう。



fig. 1¹³

ロビンソンが思い起こすのは、19番目の秘宝である〈太陽〉のカード(fig.1)である。このカードにはfig.1からもわかるように、太陽の下で手を取り合う双子が描かれている。船長による謎めいた解釈を見てみよう。

太陽の〈都市〉—— 時間と永遠、生と死の間で宙づりである —— において、住人は、子供らしい無垢を纏っている。そして、彼らは、両性具有者にもまし

¹² Lynn Salkin Sbiroli の前掲書、p. 59-124 にわたって、12枚のカードと小説の対応関係が詳細に分析されている。しかし、このような研究はトゥルニエ研究者にとっては貴重な分析であるが、2章以降の細部を読み落とすことになる上、小説の読みの可能性を作家の意図に還元することにもなりかねないことは留意すべきである。

¹³ 図像は Lynn Salkin Sbiroli の前掲書、p. 110 から借用した。

て、循環的である太陽的な性に到達しているのだ。自分の尾を噛む蛇は、非の打ち所がない、自らの上で閉じた性愛の図像なのだよ。これは人間の完全性の頂点であり、手に入れるのも限りなく難しいが、保つのは一層困難だ。どうやら君はそこまで上ることが運命づけられているようだね。(VLP, 6)

fig.1 では見づらくなっているが、2 人の人間を囲う地面に横たわる輪が蛇である。太陽を崇めるロビンソンは、いまやまさに「太陽の〈都市〉」の住人に相応しいが、このカードを思い出して、ロビンソンとフライデーはこの双子になぞらえられる。船長の解釈に即して、この2 人の関係が蛇に象徴される性乗り越えた、「人間の完全性の頂点」に到達したことが証明されたことになるのである。すでに島との性愛関係を絶っていたロビンソンは、フライデーとの間にも性的な関係がなかったことに気が付く。大地から太陽(火)へと向けられた元素的な状態へ回帰したと捉えられたロビンソンの性は、変身を遂げた人間の極点として理解されている。つまり、この主人公はタロットカードとファン・デイセル船長の解釈に沿って、自らの変化とフライデーとの関係を読み解いているのである。

③ここまでですすでに展開されつくしたかに見えるフライデー解釈だが、これで終わらず、ロビンソンの夢はさらに極端なものとなっていく。ロビンソンは、闇夜に浮かぶ月を眺めていると、月の表面に渦巻運動があることを見つける。その中にロビンソンは、卵が産まれるのを見出だし、その卵が2 つに割れていくところからロビンソンの頭には、再度双子の夢が浮かぶ。

ジュピターが変身した白鳥に孕ませられたレダの卵の中に、太陽の〈都市〉の双子であるディオスクロスが産まれた。彼らは人間の双子よりもさらに親密な兄弟である。なぜなら、彼らは同一の魂を共有しているからだ。人間の双子は複数の魂である。だが〈双子宮〉は1 つの魂である。(VLP, 163)

ロビンソンの記号学は、天上の世界に自らの運命を表すしるしを見ることで完成する。ロビンソンは、月の渦巻く波模様の中に、ジュピターとレダの子供であるカストールとポリュデウケスの双子が生まれたのを見届け、自分とフライデーが神話的な双子になることを夢見ている。人間の双子は、たとえ一卵性双生児であっても、結局は2 人に分かれてしまう。それとは対照的に、ロビンソンとフライデーは1 つの魂を分け合う双子である。ここに、ロビンソンによる両者の神格化と2 人の絆の絶対化の願いを見て取ることができる。そして、この段階で、「唯一の「他者」」であったはずのフライデーはもはや他者ではなくなっているのではないか。このように解釈すれば、11 章でも

イギリスからやってきた文明人たちに対して、なぜ改めて「他者」と呼ばれるのかも明確になるように思われる。文明社会の人間たちが「他者」として定義されているとき、フライデーはもはや他者の側には存せず、ロビンソン側にいるからである。他者の定義が展開されている場面を見てみよう。ここで、ロビンソンは文明人の本質を悟り、島に残ることを決意することになる。変身を遂げ、島と共に生きるロビンソンの目に映る同郷の人々は、もはや彼にとってよそのものである。そのとき、到着した同国人たちとは、それぞれが「1つの可能世界 *un monde possible*」(VLP, 168)であることを主人公は感じる。ここで「可能 *possible*」と言われるのは、他者のそれぞれがイメージするスペランザが、ロビンソンとフライデーのいる「現実世界 *monde réel*」としてのスペランザとは異なっているからである。

この人間たちのそれぞれは、価値と、引力と斥力の中心と、重心を備えたかなり一貫性のあるひとつの可能世界であった。互いにどれほど違えども、これらの可能性はいまや共通してスペランザの小さなイメージ——なんと短絡的で表面的だろう——をもっている。このイメージの周りで可能性は組織化され、このイメージの片隅にロビンソンという名前の遭難者と混血の召使いがいるのである。[…] こういった可能世界は、素朴にその現実性を宣告する。そう、これこそが他者というものである。すなわち、他者とは現実として見なされようと夢中になる可能性のことである。(VLP, 168)

文明社会の人間たちが表現する世界(スペランザのイメージ)は、島を開拓の対象として、またフライデーを黒人奴隷としてしか考えていない。現段階では、可能性にすぎない彼らの世界が仮に現実化してしまえば、ロビンソンがフライデーとともに築いてきた無人島での生活は消えてしまう。「[他者の]このような要求を棄却することは残酷で、自己本位であり、不道德」(VLP, 169)であると幼少期から教育されてきたロビンソンは、同郷人とともに母国に戻ることで、この「可能世界」が現実化され、フライデーとともに過ごした幸福の島の記憶そのものが消えてしまうと考え、スペランザに残ることになるのである。ロビンソンは「可能世界」を拒否し、逆にフライデーは島を去ることでこの「可能世界」を現実化する道を選ぶことになる。島に残るという選択については、島の自然を踏みじり、金銭欲にまみれた文明人たちの野卑な振る舞いを見て、かつての自分の姿に戻るのを拒否するロビンソンの意志をまずは見て取るべきであろう。しかし、それと同時に、フライデーがもはや他者ではなくなっていることも明かしているのではないだろうか。つまり、帰国の道を絶ち、無人島以外の現実を徹底的に拒絶したロ

ビンソンにとって、フライデーはいまや可能性ではなく、唯一の現実であり、あらゆる他の可能性を排した絶対の世界の中心に位置する存在なのである。他者を絶対の領域に連れていくとは、同化することに他ならないだろう。しかし、この「ロビンソン—フライデー—スペランザの三角形の繊細な均衡」(VLP, 176) は、ロビンソンの見果てぬ夢にすぎない。自分とともに島に残ると信じ切っていたフライデーの出奔は、相互的な理解が保証されぬまま、他者を絶対へと導こうとするロビンソンへの皮肉を物語っていると解釈できないだろうか。「ロビンソンは、最終的に自分の経験を一義的に意味づけるだけでなく、どういう人間であるかをよくわかっている、フライデーの足取りも予測できると厚かましくも考えるに至る。例えば、それがはっきりとわかるのはロビンソンが本人には尋ねることもせず、フライデーとともに島に残るという自分本位の決意を船長につたえるときである¹⁴」とキアラ・メンゴジが正当にも述べている。双子化の夢を見ていたロビンソンの横で、フライデーは眠っていた。「フライデーは錯乱した顔を私の方に向け、異常なほどの早口で支離滅裂なフレーズを発し、それから再び眠りに落ちた」(VLP, 164)。フライデーという存在も、ロビンソンが見る夢そのものなのかもしれない。

話を少し戻すことになるが、小説をよく読めば、Vendredi-Vénus-vénusitéのように異なる語のうちにアナロジーを見出す傾向は、ロビンソンの一貫した特徴である。物語も序盤、無人島における他者の不在の影響について、ロビンソンは言葉を「文字通りに *à la lettre*」(VLP, 48) 用いることしかできなくなっていたことを記していた。ロビンソンの言語的な連想は、社会通念に従って無意識に言語を使うのではなく、語の原義がそのまま受け取られるようになった結果だと見なしうるかもしれない。実際に、Combe-lombes, torture-tortue など、ロビンソンは幾度となく、音声の類似から別々の語を結びつけている。スペランザとフライデーという固有名詞の中に具体的な意味を付与していることも忘れてはならない¹⁵。これらはトゥルニエ一流の言葉

¹⁴ Mengozzi, *op. cit.*, p. 268-269.

¹⁵ スペランザについては、かつて知り合いであったイタリア人女性を想起させる名前に端を発している。「ロビンソンは、今後島の名前をスペランザとすることに決めた。旋律豊かで晴れやかなこの名前は、ヨーク大学で学生だったころ知り合った情熱的なイタリア人女性のかなり世俗的な記憶を何よりも喚起させるものであった」(VLP, 32)。性的関係をもったことが仄めかされる女性のイメージと重ねられることは、島との性的関係が後に始まるひとつのきっかけにもなっている。フライデーの方はといえば、「金曜日」という普通名詞を与えたことについて、「人物名でも、普通名詞でもない。その両者の中間に位置しており、一時的かつ偶然的で、ほとん

遊びでもあるが、他方で、元々無関係の語の中に対応関係を見出すことで多重的な意味をもたせるに留まらず、それらを現実投影するのはひとつの錯覚でもある。同様に、月の中の渦巻運動にロビンソンとフライデーのイメージを見出したことに象徴される、事物の中にするしを見出す傾向も、ロビンソンの性格に内在した迷信的特徴であると言った方がいいかもしれない。無人島に漂着した当初、「迷信的な恐怖 *peur superstitieuse*」(VLP, 10)、「迷信的な怖れ *une crainte superstitieuse*」(VLP, 13)に襲われていたロビンソンは、様々な事物に自らの運命を読み取ろうとする。例えば、死肉を食うハゲワシに不吉なイメージを読み取っている。あるいは、ロビンソンと同じくヴァージニア号に乗せられてきた黒いネズミが、島に土着のネズミと死闘を繰り広げる場面では、無人島の自然と悪戦苦闘する自分の運命を黒いネズミに仮託している。無人島スペランザとの関係においても、「時には暗号化され時には象徴的な無数の形態を通じてスペランザからやむことなく発せられるメッセージに対して、ロビンソンは常に耳を傾けていた」(VLP, 39)と言われている。外界の事物に自らの運命の行く末を見定めようとするロビンソンの特徴が現れる最も象徴的な場面は、デフォーの『ロビンソン・クルーソー』では野蛮人の存在の証拠として恐怖に陥れる裸足の足跡をめぐる場面である。ロビンソンにとってこの足跡という「しるし」は、スペランザが「半ば野生のアルゼンチンの平原にいる焼き印を押された牝牛の群れの中の1頭のように、領主と主人の刻印を負っていた」(VLP, 40)と言われ、足跡がその主であるロビンソンの島に対する支配を正当化する証しとして受け止められている¹⁶。以上のようにロビンソンの行動を小説全体から読み返すことで見えてくるのは、しるしに至る所に見出す迷信的で、意味に飢えたロビンソンの振る舞いが最高潮に達するのが、10章の末尾を飾るフライデーとの双子化の夢である、と解釈可能なことである。確かに、フライデーについても、「新たな時代」が何かを知るには、「おそらくフライデーの性質そのものにおいて、その予兆を読み取るように努めなければならない」(VLP, 132)と言われていた。ロビンソンが変身してきたのは、フライデーを理想像としてそれに近

ど付随的な性格が烙印された、半分は生きていて、半分は抽象的である存在の名前」(VLP, 103)と言われている。

¹⁶ このような場面は、枚挙に暇がないが他には例えば、石鹼の木と性行為をしていた後に、クモにさされたロビンソンは、このことに「植物の道はおそらく危険な袋小路だというしるし *signe*」(VLP, 86)を見て取るし、スペランザとの性愛関係を含め、様々な場面で聖書の一節を自らの状況を解釈するための材料にしていたことも思い出してもいいだろう。

づこうと努めた結果である。そして様々な事物にしるしを見て取り、それを解説してきたからであり、双子のイメージも変身の完成を象徴するものであるかもしれない。しかし、小説を通して「無口の連れ」（VLP, 157）と言われるフライデーの内面が明かされず、10章の「航海日誌」においてもフライデーの言葉はほとんど登場しない。それにもかかわらず、フライデーとともに天上的な存在となることを夢見るロビンソンの記号解釈は、フライデーを置き去りにしたひとりよがりの空想であると感じざるを得ない。もちろん、「私はアレゴリーの森の中で自分自身を探していた」（VLP, 164）と語るロビンソンの言動が全て妄想であると考えする必要はないだろう。しるしの解説という行為に両義的な意味を読み取るべきだと言いたいのである。ロビンソンにとって、フライデーは常に謎であり、だからこそ、記号化してその意味を読み取ろうとする。外界と人間の照応関係を探るロビンソンのアナロジー的発想によって、独自の哲学的かつ詩的なイメージが展開されていることは間違いない。その一方で、他者に自分の視点から意味を与え、同化してしまう人間の性も書き込まれているのである。トゥルニエは、他者と1つになりたいという願いとその不可能性をフライデー出奔のエピソードに込めたかったのかもしれない。付け加えて言えば、このロビンソンへのアイロニーは、当然フライデーの逃走に不意を突かれた読者に対しても向けられているとみなしうるだろう。すなわち、ロビンソンを中心として語られるこの小説をロビンソンの視点と同化してそのまま受け取り、フライデーを理解したつもりになっているからである。このように、ロビンソンと読者の、他者と登場人物理解における錯覚と倨傲を痛快にも見せつけることが、フライデーの裏切りに込められた意味なのではないだろうか。

これまで見てきたしるしを読み解く主人公へのアイロニーという見方は、トゥルニエの第2作目の小説である『魔王』との関連からさらに考察することができる。フライデーのみならず、外界にしるしを読み取るロビンソンは、『魔王』の主人公アベル・ティフォージュと相似しているからである¹⁷。

¹⁷ プレイヤード版でも言及されている通り、トゥルニエには、『フライデー』で文壇デビューする以前に書かれた日記体の小説「オリヴィエ・クロモールの喜びと涙」という草稿がある。これは、『魔王』の元になっているだけでなく、そのまま『フライデー』に引用されている部分もある。件の草稿が公開されていないために、トゥルニエの初期2作を総合的に捉える研究はまだ進んでいないが、今後の進展が期待される（Michel Tournier, *Romans*, éd. cit., p. LII-LIII を参照のこと）。

あらゆるものはしるし *signe* である。しかし、我々の近視と難聴を突き破るためには、一筋の光か耳をつんざくような叫びが必要である。コレージュで経験した通過儀礼としての歳月以来、私は、絶えず己の道に記された象形文字に目を向け、耳元でささやかれる漠とした言葉に耳を傾けてきた。そのときは、何も理解できず、己の人生の振る舞いに対して新たに加わる疑い以外は何も引き出すことができなかつたが、天は空虚でないということもまた確かに繰り返し証明されていたのだ¹⁸。

冒頭で開陳された主人公ティフォージュのこのようなヴィジョンが小説の基調をなし、しるしを見抜くための光と叫びを見出すための精神的な彷徨こそが、『魔王』という小説であるということもできるだろう。世界を「しるし」として捉える主人公のティフォージュは、カリスマ的な性格をもった学友のネストールをあがめた学生時代、成人後に捕虜となりナチスドイツ支配下の東プロイセンに赴いた先でも、記号解釈を通して世界の意味を把握しようとする。形式としても『フライデー』と『魔王』では、自らの生を解釈する主人公の日記の言葉と、この人物とは距離を置いた三人称の視点が交錯する点で共通している。そして、両作品には、現実の中に意味を見出そうとする人間の知的格闘と変身の過程が描かれると同時に、両者の行き過ぎたしるし解釈によって、現実や歴史から逸脱してしまう皮肉の両面が描かれている。ティフォージュの錯覚が暴かれるのは、ナチスの崩壊という歴史そのものの運命であったのに対して、ロビンソンの方はフライデーの出奔である。

「航海日誌」はなぜ再び登場するのか

ここまでは、ロビンソンによるフライデーへの一方的な同一化としるし解釈へのアイロニーという視点から、フライデーの不意の旅立ちについて見てきた。しかし、最後にもう1つ検討すべきことがある。それは、10章が「航海日誌」というロビンソンの言葉だけで構成されていることである。このことはすでに見たように、フライデーの沈黙とロビンソンの過剰な記号解釈を導くものとして見なすことができる。しかし、1度やめたはずの「航海日誌」が、なぜ復活しているのかという問題がある。トゥルニエ作品における時間に着目するマチルド・バタイエは、この点に疑問を投げかける数少ないトゥルニエ研究者の1人である。この研究者によれば、10章で描かれる「現在という瞬間 *instant présent*」や「永遠の現在 *présent éternel*」を経験することこそ

¹⁸ Michel Tournier, *Le Roi des Aulnes*, dans *Romans*, éd. cit., p. 193.

が、過去に沈潜し、未来へと時間を先送りしてきたロビンソンの変身の最終的な到達点である。その一方で、彼女はフライデーと和解して以来中断されてきた「航海日誌」が、この10章になって再び登場することに困惑を示している。「日記を断念することは、日記というものが現在へと捧げられた登場人物の新たな生に不相当であることを示している。 […] それならばどのようにして「航海日誌」が唯一10章において再開されることを説明できるだろうか¹⁹。」「航海日誌」を再び書き始めたことは何を意味するのか。三人称で語られる12章において、ロビンソンの変身が完成すると解釈することで、バタイエは自身の疑問に直接答えを出していない。しかし、「航海日誌」が再開されたことを理解するための鍵は、フライデー到着以前のロビンソンの哲学的考察の中に隠されているように思われる。

時間感覚を失うことで動物的レベルにまで墮落した生活を立て直すべく作られた水時計が止まり、人工的な時間のたがが外れると、ロビンソンには至福の瞬間が訪れる。開拓と支配の対象としか見なしていなかったスペランザの自然の美しさにロビンソンは気が付くのである。「無垢のひとつとき *moments d'innocence*」(VLP, 66)と名付けられたこの出来事において、スペランザの自然を彩る事物は、人間の主観的認識に依存せず、それ自体で自立的に存在している。ロビンソンは、即自の世界へと参与していたのである。この経験を踏まえ、主人公は興味深い認識論を披露している。ロビンソンは、「他者による認識 *la connaissance par autrui*」、「私による認識 *la connaissance par moi-même*」(VLP, 68)、「無垢のひとつとき」におけるありのままの事物の在り方の3つに分類している。ここで問題となるのは、ジル・ドゥルーズが「ミシェル・トゥルニエと他者なき世界²⁰」で見事に分析してみせた「他者による認識」ではなく、ロビンソンという反省的自我による認識と事物の即自的な状態の関係である。

¹⁹ Mathilde Bataillé, *Michel Tournier. L'écriture du temps, préface de Arlette Bouloumié*, Rennes, Presses Universitaires de Rennes, 2017, p. 70.

²⁰ ドゥルーズの見方によれば、他者こそが人間の普遍的な主観的認識を支える「知覚的な場の構造 *une structure du champ perceptif*」(Gilles Deleuze, *Logique du sens*, Paris, Éditions du Minuit, coll. « Critique », 1969, p. 357)であるが、ロビンソンの言葉とはややずれている。ロビンソンは他者を介した認識の背後に「私による認識」を想定しているからである。また、ここではドゥルーズの言う「知覚 *perception*」ではなく、「認識 *connaissance*」が問題となっている点にも注意すべきである。

我々の通常の存在様式である、素朴で原初的であり、衝動的ともいえるようなこの段階においては、認識されるものの幸福な孤独があり、またそれ自体の中にあらゆるものを所有している事物の純真性がある。(VLP, 68)

人間によって認識される以前の原初的段階における事物は、人間によって意味付けされなくとも、「色、匂い、味、形」(VLP, 68)を備えた完全体である。事物の意味を与えるのは人間ではないのだ。無人島におけるロビンソン以外の人間がいない状況で、主観性に規定されない事物の本来の在り方に気付かされるのである。しかし、ロビンソンという主体の存在が妨げとなって、物体 *objet* のこのような幸福状態は決して続かない。「かちりという音 *déclac*²¹」(VLP, 68) が鳴り、主体が物体へ働きかければ、物体 *objet* は主体へと吸収されてしまう。具体的に言えば、光は人間の目となり、匂いは鼻になり、風の音は鼓膜の振動でしかなくなるという。それゆえ、「かちりという音 *déclac* は世界の合理化に他ならない。世界はそれ自身の合理性を求め、こうしてこのくずを排出する、主体というくずを」(VLP, 69) と言われることになる。認識主体というのは、それぞれの事物がそれ自体で存在している状態に介入し、人間にとって不合理のない世界へと転じる際に生じる廃物に他ならない。スペランザの自然に働きかけて人工物へと変えるロビンソンの試みの空虚さと相関して、認識主体は、事物の無垢を損なう邪魔者でしかない。このように認識主体を余剰 *trop* と考えるのは、サルトル『嘔吐』の主人公ロカンタンと共通しているが、ロビンソンの独自の点は、認識における時間性を強調していることである。例えば、ロビンソンの目には一瞬木が動いているように映る²²。しかし、動く木というものは現実には存在しないので、そのイメージは山羊であると判断されることになる。この前後する2つのイメージにおいて、前のイメージが修正され、誤謬の判断が下されるのは「適及的」(VLP, 69) であるとされる。つまり、主体と客体 *objet* の間にある時間的なズレが問題となっている。合理的な主体による思考とは常に遅延を伴っているのである。世界の合理化という意味では、確かに自らの感覚に生じた矛盾を修正することができるが、同時に事物本来の輝きを損ない、歪曲するという意味で常に誤りとなるのがこの反省的自我による認識である。このような

²¹ *TLFi* によれば、「無意識に、衝動的な思いつきで、咄嗟に生じる内的なメカニズムのこと」という定義があり、これが恐らく相応しいが、適切な訳語が見当たらないので、動的なイメージを踏まえ「かちりという音」と訳しておいた。

²² 島に上陸して間もない頃、見知らぬ土地で恐る恐る歩くロビンソンの前に現れた山羊のエピソード (VLP, 10)。

ロビンソン自身の哲学的省察を踏まえるならば、日記をつけるという行為自体に伴う矛盾も明らかになるだろう。日記に文字を綴ることには必然的に認識主体が伴い、描写される対象 *objet* は決してありのままでは捉えられず、描かれる対象と実際の事物の間には遅延が発生するからである。「一日一日は互いに似通っていたので、私の記憶の中では一日一日は正確に重なり、絶え間なく同じ日を生き直しているように思えた」（VLP, 155）という言葉に集約される永劫回帰のヴィジョンも、「無垢のひとつき」の持続として捉えられていた。「私はずっと無垢のひとつき *un moment d'innocence* の中に暮らしていたのだ」（VLP, 156）。ロビンソンが再び筆を執ることだけでなく、即自の世界の発見としるしを読むロビンソンの姿を重ねてみれば、この人物の自己撞着ぶりは一層明瞭になる。フライデーに同化し、しるしとして他者の意味を解釈するロビンソンには、同時に自身の経験と省察に対する裏切りが隠されているのである。

結び

フライデーの裏切りという大きな落とし穴によって、『フライデー』は単なる牧歌小説あるいはユートピア小説ではなく、ほろ苦い皮肉を含んだ小説となっている。疑似文明社会が自壊したように、ロビンソンのしるしあるいは寓意としての世界、フライデーとの絶対の世界もあえなく崩れ去るのである。ロビンソンは、身軽で笑い上戸のフライデーの中にアイロニーを見出し、太陽に向かって「アイロニーを教えてください」（VLP, 154）と言っていた。しかし、認識主体によって事物と経験の純粋性を必然的に損なってしまうことを悟っていたにもかかわらず、「航海日誌」を書き、他者にしるしを見出すロビンソン自身の振る舞いの中に、アイロニーは如実に体现されている。これまでは、『フライデー』をロビンソンの変身が1つの到達点に至る直線的な通過儀礼小説として捉える研究がほとんどであった。しかし、変身を可能にしたロビンソンの他者への同化、しるしとしての世界を読み解くロビンソンの記号学に危うい両義性が書き込まれていると読むことによって、小説の面白さは引き立つのではないだろうか。